『元朝秘史』における叙述のダイナミクスと作者の交代～故郷への帰還の役割とコロフォン§282における特異な終結の分析～

Narrative Dynamics and Authorial Shifts in the *Secret History of the Mongols*: Analyzing the Role of Homeland Returns and the Distinctive Closure in Colophon §282

藤井 真湖

Mako Fujii

Abstract

This study centers on the narrative convention in heroic epics, where the climax typically involves the protagonist's return to their homeland, applying this concept to the *Secret History of the Mongols*（SHM）. The text references three returns to the homeland, allowing for its division into four parts. However, the final part uniquely excludes Colophon §282, forming an independent Part V. Notably, a significant shift in the 'first author's' sentiment is suggested at §263, which correlates with the mention of the hero's return to the homeland in §264. This marks a pivotal point in the narrative. Following this, Parts III and IV, interspersed with two Šilginček (verses), imply that the 'second author' composed §282 in contrast with the 'first author's' narrative culminating in §264.

キーワード

元朝秘史、英雄叙事詩、チンギス・カン、作者、コロフォン、シルギンチェク

はじめに　『元朝秘史』のモンゴル英雄叙事詩性

本論は2023年8月10日に第12回国際モンゴル学会（The 12th International Congress of Mongolists “Pax Mongolica and Historical Experience”）での口頭発表とその後提出したフルペーパーの内容に加筆・修正を加えたものである[1]。本論で加筆したのは、いわゆるコロフォンと呼ばれている秘史の最終節である続集巻二の§282の考察である。修正した箇所は、“英雄叙事詩的設定”と“実際に書かれた時代”に関わる議論である（本論の3．3を参照）。

筆者はこれまでモンゴルの『元朝秘史』（以下、秘史）を英雄的叙事の観点から考察してきたが、伝統的に“モンゴル英雄叙事詩”と分類されてきた多くの伝承とは異なり、秘史の内容はンゴル英雄叙事詩の口頭伝承の「伝統」を踏まえながら、最初から書かれたものであると考えられる。モンゴル英雄叙事詩に特徴的な構造とは、明示的レベルの内容と非明示的レベルの内容が正反対あるいは対称的に対応するような構造のことを指している。秘史に関わるこれまでの拙論においても、筆者は秘史の内容における明示的レベルと非明示的レベルの内容が正反対に対応していることを指摘してきた。それゆえ、秘史がモンゴル英雄叙事詩の一作品として扱われうることは妥当であろう。

１．本論の目的と議論の流れ

１．１　本論の目的

本論は、英雄叙事詩の定型的結末として主人公勇者の故郷への帰還があることに着目し、秘史をこの基準で分節することを通して、秘史の全体的な叙述構造を明らかにすることを目的とする。とくに、最終節の§282 は、故郷への帰還という形ではないものの重要な箇所であり、§282 で示される多くの非明示的な内容を考察することを通して、ここで示されている「子」の年と秘史 “作者”についての仮説もあわせて提示することも目的とする。

１．２　議論の流れ

本論では、モンゴルの英雄叙事詩の特徴に着目して秘史の叙述を分析し、その流れを次のように展開する。初めに、1.3 節で対象文献を紹介し、1.4 節では本論を進めるための前提条件を示す。その後、第 2 章では秘史内で主人公たちが故郷に戻る箇所を特定し、これらを叙述の区切りとみなす。ただし、最終節である§282（コロフォン）は帰還で終わらず、これは秘史を一つの統一テキストとして扱う際の「例外」と考える。このような区切りが秘史には 3 つ存在することを指摘し、2.1 節から 2.3 節でそれぞれの節を紹介し、その内容を確認する。

第 3 章では、これらの考察に基づき、秘史全体の構造に焦点を当てる。3.1 節では、3 つの区切りが特定されたことから、秘史がⅠ～Ⅳの 4 つのパートに分けられると指摘し、各パートを系譜的・政治的な観点から考察する。各パート間の論理的なつながりも検討する。3.2 節では、3．1 に基づき各パートが「書かれた」君主の時期についての仮説を提起する。加えて、英雄叙事詩には父と息子、または父―息子―孫という二世代または三世代の叙述形態をとるものがあることを考慮に入れ、Ⅰ～Ⅳが「書かれた」君主の時代の組み合わせとして 4 つのパターン（A～D）があることを指摘する。さらに、パートⅡの最後の節である§264 が重要な転換点であることを指摘し、秘史の叙述構造がこれらのパターンのうち 2 つに絞られることを示す。3.3 節では、各パートが「書かれた」とされる君主の時代が実際は次の君主の時代以降に書かれた可能性が高いことを指摘する。

第 4 章では、秘史の最終節である§282 の分析をおこなう。4.1 節では、従来「Šilginček（シ

ルギンチェク）と・・・の間」と解釈されてきた箇所を再解釈し、本論で提案された区切りの妥当性を示す。4.2 節では、「Kelüren-ü Köde'e_aral（ケルレンのコデエ・アラル）の Dolo'an_boldaq-a（ドローン・ボルダク）」という地名が非明示的な意味で使用されている可能性を指摘し、その内容を明らかにする。4.3 節では、§282 が“第二の作者”によって§264 を参照しながら書かれた可能性を示す。4.4 節では、秘史における二人の“作者”を特定し、その妥当性について議論する。最後に、第 5 章で本論文の結論と今後の課題を述べる。

1.3　対象文献

本研究では、四部叢刊本の続集二巻を含む全十二巻を「一つの作品」として捉え、これを総合的に分析の対象とする。秘史の編集過程に関しては様々な説が存在するが、本研究ではこれらを連続体として扱うことにする。秘史の研究において、原文の音訳漢字のローマ字転写には、栗林均・确精扎布編の『元朝秘史 モンゴル語全単語・語尾索引』（2001 年）を基準にする。これは四部叢刊本を定本として編纂されたものである。また、訳語については、小沢重男の『元朝秘史全釈』3 巻と『元朝秘史全釈続攷』3 巻（1984～1989 年）、ならびに岩波文庫の『元朝秘史』上下巻（1997 年）を参考にする。

1.4　本論を展開するさいの諸前提

本論の議論を進めるにあたり、以下の 3 点の前提を設けている。

① 主人公の勇者が故郷に帰還するシーンに関して、モンゴル「内部」での戦いからの帰還は含めない[2]。

② テキストが挿入や変更を受けていないという仮定を採用する[3]。この仮定は、アルタイ・ウリヤンハイ集団の伝承における伝統に触発されている。筆者は 1990 年代に当該集団の著名な叙事詩の語り手故アビルメド氏からの聞き取りで、当該集団では即興は禁じられており、英雄叙事詩の内容は決して変更されてはならないという作法があることを知った[4]。実際のテキストが時の経過とともにやむなく変化することはあったとしても、この作法はモンゴル英雄叙事詩の伝承全般に通じるものになっていたのではないかと筆者は推測している。

③ 秘史の成立年に関しては、伝統的な歴史学の厳密な年代に限定されない柔軟なアプローチを採用する。つまり、特定の出来事が記された年は実際の年を指すというよりも、象徴的な意味を持つ場合があることを考慮に入れる。

2.　重要な区切れ地点の特定：主人公の故郷への帰還

前提が整ったところで、次に重要な区切れ地点である主人公の故郷への帰還に焦点を当ててみたい。上記で述べたように、秘史には英雄たちが故郷に戻る 3 つの重要な箇所がある。これらは続集巻 1 の§250 と§264、そして続集巻 2 の§274 に見られる。これらの箇所がどのような意味をもちうるのかを明らかにするため、以下の考察でこれらの節を詳細に分析する。

2.1 第１の区切れ地点（§250）

秘史の第１の区切れ地点は、チンギス・カンの故郷への帰還に言及されている続集一§250 である。当該節では、チンギスの重要な軍事的勝利が叙述されている。ここでは当該節をすべて示すことにする。原文の斜体は筆者によるものであり、故郷帰還を表示している箇所である（栗林均・确精扎布編　2001：514）。

11:10 : 06 Činggis_qahan tere morila=qsan- ṭur Kitat_irgen-ü
チンギス・カンは、彼が出征したところ、キタド人の
11: 10: 07 Altan_qa’an-i else'ül=ǰü olon a'urasun ab=ču
アルタン・カアンを支配下に入れ、多くの物資を獲得し、
11 :10:08 Qašin_irgen-ü Burqan-ni else'ül=ǰü olon
カシン人のブルカンを支配下に入れ、多くの
11:10:09　tem’et ab=ču Činggis_qahan qonin ǰil tere
駱駝を連れてきてチンギス・カンは未の年（1211 年）、彼が
11:10:10 morila=qsan-ṭur Kitat_irgen-ü Aqutai neretü
出征したところ、キタド人のアクタイという名前の
11:11 :01 Altan_qan-i else'ül=ǰü Tangγut_irgen-ü
アルタン・カンを支配下に入れ、タングート人の
11:11 :02 Iluqu_Burqan-ni else'ül =ǰü *qari=ǰu Sa'ari_ke’er-i*
イルク・ブルカンを支配下に入れて帰還し、サアリ・ケエル[5]に
11:11:03 *bawu=bai.*
宿営した。

上記の§250 は、①続集一の最初のセクションである§247、②§248、そして③§249 の先行節の包括的な要約として機能している。チンギス・カンの遠征の出来事を統合する箇所であり、物語の重要な節目を示していることは明らかである。これにより、物語は新たな展開に移行し、次の重要な区切り地点へと導かれる。

2.2 第２の区切れ地点（§264）

この新たな区切れ地点は、続集一§264 で見られる。この節は、物語の流れにおいて重要な転換点を提供している。以下に全文を示す（栗林均・确精扎布編　2001：554，556）。

11:51:09 Sarta'ul_irgen-ṭür dolo'an hot yabu=ǰu tende
サルタウル人のところで７年過ごし、そこで

11:51:10 Jalayirtai Bala-yi güliče=ǰü bü=qüi-ṭür Bala Šin_müren-i
ジャライル人のバラを待っているときに、バラはシン河を
11:52:01 ketül=ǰü Jalaldin_soltan Qan_Melik qoyar-i Hindus-un
渡って、ジャラルディン・スルタンとカン・メリクの二人をヒンドゥスの
11:52:02 qaǰar-a gür=tele neke=ǰü Jalaldin_soltan Qan_Melik
地に至るまで追跡し、ジャラルディン・スルタンとカン・メリクの
11:52:03 qoyar-i ǰabqa=ǰu Hindus-un dumda gür=tele eri=ǰü
二人を失って、ヒンドゥスの中に至るまで捜索したが、
11:52:04 yada=ǰu qari=ǰu Hindus-un kiǰi'ar irgen-i dauli=at
（捜索）できずに帰り、ヒンドゥスの辺縁の人々を略奪して、
11:52:05 olon teme'et olon serkes-i ab=u=at ire=ǰü'üi.
多くの駱駝と多くの去勢山羊を連れて来た。
11:52:06 tende *Činggis_qahan qari =ǰu ǰa'ura Erdiš-i ǰusa=ǰu*
それから、チンギス・カンは帰還して、途中エルディシュで夏を過ごし、
11:52:07 *dolodu'ar hon takiya ǰil namur Tūla-yin Qara_tün-ne*
7年目の酉の年の秋、*トーラ河のカラ・トゥン[6]に*
11:52:08 *ordos-ṭur bawu=bai.*
オルド（宮帳）のあるところに宿営した。

上記の§264の次節では、チンギス・カンの西夏への最終遠征と彼の死について詳細に述べられている。そのため、§264が後続の節と内容的に非連続になっているのは明らかである。特に重要な点は、§264が地の文で使用される「我々」という表現が最後に現れる節である§263と連動していることである。これは「我々」という表現に“作者”の存在が強く示唆されているからである（藤井2011：45-66）。§263が「我々」という表現の最後の例であることは、“作者”が中央アジアのヤラワチやマスウドなどの行政官の生き方を知り、忠誠心に関する重要な洞察を得たことによると推測される[7]。その洞察とは、誰に忠誠を尽くすかではなく、自己の能力を最大限に活かし、時の権力の変遷に影響されない生き方を重視することの重要性である。これは、“作者”がこれまでに堅持してきた価値観の転換を示している（藤井　2011：64）。

2.3 第３の区切れ地点（§273）

第3の区切れ地点は続集巻二§ 273である。その内容は以下の通りである。ここでも全文を示しておく（栗林均・确精扎布編　2001：582）。

12:25:10 tedüi Altan_qan-ni muqutqa=ǰu se'üse nere ök=ču
こうして、アルタン・カンを征伐して、“セウセ”（召使い）なる名前を与え、

12:26:01 altan mönggün altatai hartu a'urasun tabar alašas

金銀、金糸の模様のついた絹布、財物、馬匹

12:26:02 se'üses-i an-u dawuli=ǰu alginiči tammačin talbi=ǰu

召使いたちを略奪して、先遣隊とタンマチ軍を配置して

12:26:03 Namging Jungdu ǰük ǰük-tür balaqasun-ṭur daruqačin

南京、中都の各所に城塞にダルガチを

12:26:04 talbi=ǰu *tübšin tükel qari=ǰu Qara_Qorum-a bawu=bai.*

配置して、*平和裡に帰り、カラコルムに宿営した。*

ここでは、チンギス・カンが未完成の状態で残した金朝征服の完遂と、オゴデイの故郷凱旋が述べられている。金朝の滅亡は、大きな政治的区切りであるといえる。この箇所の重要性は、金朝平定がモンゴルの「独立」に関わる重要な出来事であるためである。秘史では明確には述べられていないものの、巻 4 の§132～§133 で、チンギスが金朝からの対タタル戦への参加要請に応じている点から、チンギス陣営がジャムカ陣営との戦いに敗れた後、金朝の支配下に入った可能性がある（藤井 2016：12）。したがって、金朝を征伐しての帰還は、ある種の「独立」を意味するのである[8]。

3. 区切れ地点によって生み出された４つのパートとその系譜的・政治的正統性の考察

3.1　各パートにおける系譜的・政治的正統性の考察

本論では、秘史を 3 つの区切れ地点を基に 4 つの部分に分ける：パート I（§§1-250）、パート II（§§251-264）、パート III（§§265-273）、そしてパート IV（§§274-282）である。ただし、§282 の末尾が故郷への帰還を含んでいないため、この区分は慎重に考慮する必要がある（このIVは後続の考察の中で若干変更されることになる）。各パートの概要は以下のとおりである。

パート I は、青灰色の狼の系譜を詳述し、チンギス・カンの業績に焦点を当てている。この部分は系譜学的には分析が難しいが、チンギス・カンの権威の確立を理解する上で重要である。パート II では、政治的正統性に焦点を当て、特にオゴデイがチンギス・カンの後継者として家族会議で決定されていることが重要である。続集巻一§255 では、チャアダイが兄ジョチの嫡子性に疑問を呈し、チンギスがそれをたしなめる発言がある。その後、チャアダイはオゴデイを後継者として支持し、ジョチも同意する。ジョチの発言を受けて、チンギスはオゴデイに発言を促す（栗林均・确精扎布編　2001：534）。

11:31:02 …（略）…Ögödei ügüle=rün

オゴデイが言うには、

11 :31 :03≪qahan-eče soyurqa=ǰu ügüle= ke'ekde=esü ya'u-ban

カアンから嘉して言えと言われるなら、何を

11:31:04 ügüle=gü bi. ülü čida=qu ke'e=n ker ügüle=gü.
言いましょう、私は。できませんなどと言えるでしょうか。
11:31:05 čida=qui-bar qata'uči=suqai gü ke’e=mü ǰe. mona qoyina
できるかぎり、精進してまいりましょう」と言うだけです。この後、
11 :31:06 maqa uruq-tur min-u öleng-ṭür quči=asu hüker-e
私の親族に、新鮮な草にくるんでも、牛に
11:31:07 ülü idekde=gü. e’ükün-ṭür quči=asu noqay-a
食べられず、脂肪にくるんでも、犬に
11:31:08 ülü idekde=gü töre=esü qandaqai ketüs
食べられないような（子が）生まれると、大鹿が横切っても（それを正確に射れなかったり）
11:31:09 quluqana čöles alda=quy u'u. edüy-yü’en ǰe
野鼠が突出してきても（それを正確に射れずに）そのまま通り過ぎさせてしまう。これだけが
11:31:10 ke'e=mü. busu ya'u ügüle=gü bi.≫ke'e=be.
言うべきことです。それ以外に言うことがあるでしょうか」と言った。

チンギスはオゴデイの言葉を是として、トルイにも意見を聞く。トルイは父の名ざしたオゴデイに協力する旨のことを言う。以上のようにチンギスは 4 人の息子たちすべての意見を聞いて、最後に次のように言う（栗林均・确精扎布編　2001：536）。

11:33:05 …Ögödey-yin urug-i öleng-ṭür
…オゴデイの親族が新鮮な草に
11:33:06 quči=asu hüker-e ülü idekde=gü. ö’ükün-ṭür
くるんでも、牛に食べられず、脂肪に
11 :33:07 quči=asu noqay-a ülü idekde=gü töre=esü min-u
くるまれても、犬に食べられないようなものが生まれても、私の
11 :33:08 uruq-tur niken ü’ü sayin ülü töre=gü a=ǰu'u.≫ke'e=n
親族にひとりくらい良きものが生まれないことがあろうか」と
11:33:09 ǰarliq bol=u=at
お言葉を発して

注目すべき点は、オゴデイとチンギスが、将来無能な後継者が生まれるかもしれないという懸念を同じ比喩で表現していることである。R.グルッセ氏は、オゴデイの発言を、1251 年のモンケのカアン選出に伴う、オゴデイの系統からトルイの系統への権力移行の予測と解釈している（De Rachewiltz, 2004, p.xxx）[9]。しかし、文脈に即すると、オゴデイの発言は予言というよりは、彼の後継者に対する深い懸念のようである。チンギスにとっては、どの息子の子孫が君主

になろうと、彼の子孫であることに変わりはなく、彼は支配者の資質にのみ関心を持っている。一方、オゴデイにとっては、次の支配者が自分の息子か兄弟の子孫かということが重要である。つまり、オゴデイは自分の系譜の持続性に懸念を抱いているのである。

パート III では、チンギス・カンの死、オゴデイの帝位引継ぎ、およびオゴデイの身代わりに死ぬトルイの物語が語られている（続集二の § 272）。

パート II とパート III ともに、オゴデイがチンギス・カンの指名後継者であることが確認されている。この点で 2 つのパートは内容的に重複している。しかし、これら 2 つのパートは異なる時期に書かれたものと思われる。なぜなら、パート II はチンギスの故郷への帰還になっているのに対して、パート III では、オゴデイの故郷への帰還が叙述されているからである。

系譜的・政治的な観点から指摘したいのは、パート II と対比すると、パート III では、オゴデイの権威が低下していると考えられることである。トルイがオゴデイの身代わりになって命を落とす話は、オゴデイ派とトルイ派の対立に起因するものと思われ、この内部の闘争でオゴデイ派の正統性が強調される形になっているからである。オゴデイが正当な後継者と見なされているからこそ、どちらかが命を落とさなければならない場面でオゴデイを生き残らせているのである。しかし、オゴデイとトルイを対比したうえで、オゴデイを強調する必要があるということは、逆に彼の権威が低下していることを示唆している。つまり、パート II でオゴデイの正統性はチンギスと彼の 4 人の息子たちによって決定されたとはいえ、パート III ではオゴデイの権威が揺らいでいるのである。

パート IV では、チンギス・カンの長子であるジョチの息子バトゥに対して、チャアダイの息子ブリとオゴデイの息子であるグユクが傲慢な態度をとってトラブルとなった出来事が語られている（続集二 § 275）。特筆すべきは、オゴデイが自身の息子であるグユクを厳しく叱責していることである（続集二の § 276）。

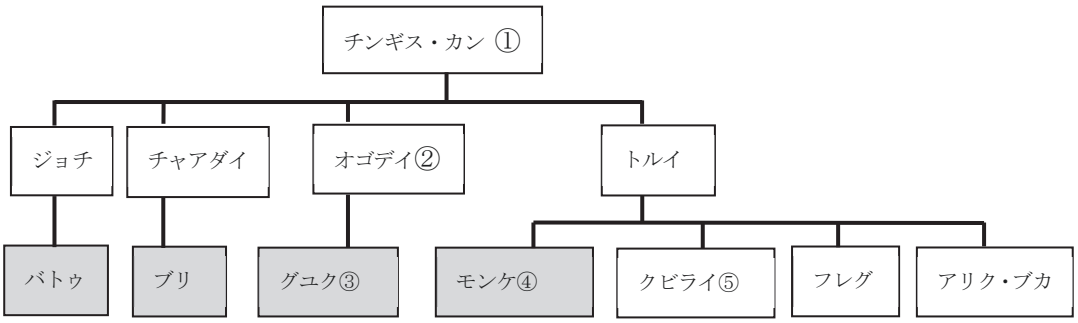

図 1　モンゴル帝国におけるチンギス以降の君主の系譜

史実を踏まえると、パート IV では、チンギス・カンの子孫の中でブリとグユクが問題視されているのに対し、トルイの子モンケは不名誉な扱いを受けていないことが注目に値する（図 1 の灰色ハイライト部を参照）。バトゥは被害者ながらオゴデイからリスペクトを受けている（こ

れは明示的に示されている)。秘史の叙述におけるバトゥの扱いを見ると、バトゥはオゴデイからリスペクトを受けるほど実力がありながらも、彼の父親ジョチの嫡子性への疑問が提起された段階（§254）で後継者候補のリストからはずれているといえる。こうした後継者の叙述に基づくと、モンケをチンギスの正統な後継者と見なす意図が感じられる。つまり、オゴデイの息子グユクではなく、トルイの息子モンケに後継者としての妥当性を見出そうとする意図である。

ここで史実を考慮すると、パートIIおよびIIIで提示された立場は、パートIVで提示された立場と矛盾していることに着目すべきであろう。つまり、パートIIおよびIIIはオゴデイ派の立場と一致しているのに対して、パートIVはトルイ（モンケ）派の立場と一致しているのである。オゴデイ派とトルイ派の対立を考慮に入れると、パートIVはグユクが妥当な後継者ではないことを示している点で、モンケの統治時期に「書かれた」可能性があると仮説を立てることができる。

以上のように、パートIVがモンケの統治時期に「書かれた」可能性を考慮に入れると、パートIIはオゴデイが権威を確立したオゴデイ時代に「書かれた」可能性がある[10]。一方、オゴデイの権威が揺らいでいることを示唆するパートIIIは、オゴデイの息子であるグユクの時代に「書かれた」可能性がある。ただし、重要なことなので捕捉しておくと、ここで「書かれた」と括弧をつけてあるのは、実際に書かれたというよりも、“英雄叙事詩的設定”であると考えているからである。詳しくは後続の考察を参照されたい。

3.2　秘史の語りの構造についての“当面のところ”の仮説

上記の議論は故郷への帰還に言及している語りの区切れ地点を特定し、秘史が4つのパートで構成されていることの指摘から始まった。各パートを系譜的、または政治的正統性の観点から分析すると、パートIIとIIIがオゴデイ派の立場を反映し、一方でパートIVがモンケ派の立場を反映していることが明らかになった。オゴデイの視点から見ると、パートIIでは彼の後継者としての権威が確立され、パートIIIではその権威が揺らぎ、パートIVでは息子グユクの権威が失墜する様子が描かれている。

この分析に基づき、以下に“当面のところ”の仮説を立てる。ここで“当面のところ”という表現を用いるのは、本論でより複雑な仮説を後に提示するためである。現時点の仮説は以下の通りである。

パートI（§§1-250）は、チンギスの統治時期に「書かれた」可能性がある。

パートII（§§251-264）は、オゴデイの統治時期に「書かれた」可能性がある。

パートIII（§§265-273）は、グユクの統治時期に「書かれた」可能性がある。

パートIV（§§274-282）は、モンケの統治時期に「書かれた」可能性がある。

ところで、モンゴル英雄叙事詩の特徴として、複数の世代にわたる主人公が登場することがある。これを考慮すると、秘史は以下の4つの過程のいずれかを経て書かれた可能性がある。

A. パートIからIVはそれぞれ独立して「書かれた」。

B. パートIとIIは一緒に「書かれた」、一方、パートIIIとIVは独立して「書かれた」。

C. パートI、II、およびIIIは一緒に「書かれた」、一方、パートIVは独立して「書かれた」。

D. パートIIとIIIは一緒に「書かれた」、一方、パートIとIVは独立して「書かれた」。

上記の4つで共通しているのはパートIVが独立して「書かれた」と考えられることである。

次に、秘史の叙述における“作者”の立場を考察する。特に、続集巻一§263に示されるように、“作者”の忠誠心についての考え方の変化は重要である。そしてこの§263は、パートIIの最後の節である§264と内容的に連動している。このことは、“作者”がモンゴル君主の系譜や正統性に関する懸念を捨て、“作者”がモンゴル君主が誰であるかに関する関心を失い、パートIIをもって自身の語りの目的を達成したと感じていることを示唆している。言い換えると、“作者”はこの時点で、自分にとって書くべきことはすべて終えたと考えていた可能性が高い。それゆえ、パートIIとIIIの間は断絶していると見るべきである。したがって、仮説AとBがこの条件を満たす。ただし、どちらの仮説がより妥当かは、§282の詳細な考察が必要である。

3.3　“英雄叙事詩的設定”と実際に書かれた時代との違い

論理に混乱が生じることを避けるため、上記の仮説においてはパートIをチンギス・カン時代に「書かれた」可能性があると指摘したが、史実としては必ずしもチンギス時代に書かれたわけではない可能性がある。なぜなら、パートIの結末はチンギスが金と西夏を征伐して故郷に帰還したという内容であるが、金だけではなく、西夏にも言及されているからである。金をモンゴルが征伐するのは、前述のようにモンゴルの「独立」に関係する重要な出来事であるのに対して、西夏はそれには関係していないからである。西夏がモンゴルに意味をもってくるのは、チンギスが西夏遠征の最中に命を落としたという出来事があるからである。それゆえ、**パートIの末尾は、チンギスの死去した1227年より後に書かれた可能性が高い**。しかも、このパートIの最終節§250はその前の§248と§249の要約になっていることから、西夏への言及は叙述に深く埋めこまれている。つまり、西夏への言及は偶然のことではない。この西夏の件を重視すると、パートIが実際に書かれた時期がオゴデイ統治時代にもかかる可能性が出てくるのである[11]。むろん、オゴデイ時代だけでなくそれ以降に書かれた可能性も否定することはできない。

実際に書かれたわけではないが、叙述のスタンスに関わる時代のことを本論では“英雄叙事詩的設定”と呼ぶことにする。この“英雄叙事詩的設定”が、“構想された時代”なのか“書かれた時代に想定された時代”なのかは現段階では不明である。それゆえ、この概念についてはさらなる精緻化が必要である。とはいえ、“実際に書かれた時代”と対比しうる概念として、本論ではこの表現を仮設的に用いることにする。いずれにしても、“英雄叙事詩的設定”にしても“実際に書かれた時代”にしても、秘史では非明示的なレベルに属する。

この用語を用いると、パートIの“英雄叙事詩的設定”はチンギス時代であるが、“実際に書かれた時代”はオゴデイ時代以降ということになる。その他のパートについても同様のことに

なっていると考えられる。具体的に述べると、パートⅡの場合、オゴデイ時代に「書かれた」ものだとしたのは“英雄叙事詩的設定”であり、実際に書かれた時代は次のグユク時代あるいはそれ以降に及んでいる可能性がある。

振り返ると、パートⅡではオゴデイの権威がチンギス一家の話し合いのもとで確立されたことが叙述されていた。しかし、このことが強調される必要があったのは、グユクの時代であったと考えることができる。なぜなら、グユクの正統性はオゴデイの息子という系譜的正統性に置かれているからであり、グユクの政治的資質には帰されていないからである。史実としてのグユクの即位はとくに既定路線でもなかったわけであるから[12]、この叙述がオゴデイ時代ではなく、グユク時代に書かれた可能性は高い。また、グユク以降と考えると、前述のR．グルッセの§255の議論（モンケ時代の政権移譲についての予言説）も視野に入ってくることになる。つまり、ここもグユク以降とするのが当面のところ妥当であろう[13]。

パートⅡと同様に、上記の仮説のパートⅢをグユク時代に措定したのは“英雄叙事詩的設定”であり、実際は次のモンケの時代以降に書かれた可能性がある。その場合、前述のオゴデイの立場に立った解釈とは異なり、トルイがオゴデイの身代わりになった出来事についての叙述はトルイの立場に立って解釈されることになる。すなわちトルイの行為は「モンケの父トルイが自死してオゴデイに帝位を譲ってあげた」というトルイの善意の観点から眺められうるものになる。

パートⅢと同様に、パートⅣをモンケ時代に措定した時代は“英雄叙事詩的設定”であって、実際には次の時代以降に書かれた可能性があるということになる。ただし、この場合、次の時代というのはクビライではなく、アリク・ブカであったと考えられる。確かにこのアリク・ブカに秘史が関連していることは、秘史の最終節§282 を考察すると、その可能性が高いことが理解される。それゆえ、次節では§282を考察する。

4. コロフォン§282の解釈

4.1　Šilginček qoyar ǰa'ura（シルギンチェグ・２・間）の解釈

まず、当該箇所を示すと、以下の通りになる。下記に記したうち、斜体で示した部分すなわち *Šilginček qoyar ǰa'ura* の部分である（栗林均・确精扎布編　2001：614）。

[282]

12:58:05　yeke qurilta quri=ǰu quluqana ǰil quran sara-da

12:58:06　Kelüren-ü Köde'e_aral-un Dolo'an_boldaq-a *Šilginček*

12:58:07　*qoyar ǰa'ura* ordos bawu=ǰu bü=qüi-ṭür biči=ǰü dawus=ba .

小沢茂男氏はこの部分を転写文字に逐一訳を付した部分で「大聚会が行なわれて鼠の年七月に／ケルレン河のコデエ・アラルのドロアン・ボルダク（に）シルゲンチェグ／二つの間に宮居が下営している時に書き畢うた」と訳出している（小沢　1989：560）。そして、小沢氏はこ

の箇所を次のように説明している。やや長いが、重要なので引用しておきたい。ただし、下線部は筆者によるものである。

yeke qurilta quri=ǰu quluqana ǰil quran sara-da Kelüren-ü Köde'ē _aral-un Dolo'ān_boldaG-a Šilginčeg qoyar ǰa'ūra はこのモンゴル文に即して読めば、モスタルト氏の指摘をまつまでもなく、≪ケルレン河のコデエ・アラルのドロアン・ボルダクに、シルギンチェクと〔？〕の二つの間に≫と読むのが筋である。Dolo'ān_boldaG-a の如く、いわゆる与位格語尾の-a が附されており、且、Šilginčeg qoyar ǰa'ūra とある以上、上のように読むのがモンゴル語の常道である。しかし、モスタルト氏が上のように読む以前は、boldaG-a の-a にとらわれず、例えば、〔那・実〕（那珂通世氏の『成吉汗実禄』－藤井注）の「客魯嗹河の闊迭額阿喇勒の朶羅安孛勒荅黒失勒斤扯克兩の閒なる斡児朶思に…」のようにドロアン・ボルダグとシルギンチェクの二つの間に」と読まれている。モンゴル人の学者の読み方もこれと同様である。「孛勒荅黒」とあるべきものを不注意に「孛勒荅中合」と書き写したと見て了えば、上の見解が成り立ち得ようが、筆者は矢張り、モスタルト氏の見解をとって、Šilginčeg の次に、何か地名を表す一語が欠落した文として読みたい。Köde'ē _aral-un Dolo'ān_boldaG-a は単なる地名というよりは、もう少し広範囲の地域を示したものと筆者には考えられ、その《コデエ・アラルのドロアン・ボルダグに》と先ず大きく地域を限定して、然る後に、そのドロアン・ボルダグの《Šilginčeg と〔？〕二つの間に》<u>－ここで qoyar ǰa'ūra とあり、qoyar-un ǰa'ūra でないことが若干気にかかるが－</u>と地域をさらに限定しているのである。この種の語法は秘史モンゴル語の一つの特色である。この〔？〕に何を埋めるべきかの探索は実りなきものかもしれないが、おこなわれねばなるまい（小沢　1989：563）。

上記の下線部は本論において重要な論点となる。なぜなら、本論では、qoyar（２つ）-un（の）ǰa'ūra（間）の qoyar（２つ）には、「～の」を意味する属格-un が不要だと考えるからである。ここでは、原文のまま qoyar ja'ūra と解釈する。指摘すべきことは、この「～の」という属格が必要でない場合、上記で小沢が〔？〕としている語が不要となり、この部分を「２つ（を）間に」と読むことができるようになることである。この解釈を採る場合、「～を」を意味する対格が付されていないが、対格がなくとも文として成り立つ（属格の場合は省略が不可能である）。

問題は、それではここで“２つ”とは何を指しているのかである。これは Šilginčeg が２つあるという意味で解釈できる。すなわち、**Šilginčeg とは、地名ではなく、silüg-ün čeg すなわち silüg（詩，韻文）-ün（～の） čeg（区切り）の意味と解する。**つまり、Šilginček qoyar ǰa'ura の部分は、「詩文の区切りとなっているもの２つ（を）間に」となる。もう少し簡単に言えば、「２つの詩句を間に」ということになる。すなわち、「Šilginček（詩文の区切り） qoyar（２つ〔を〕）ǰa'ura（間に）」という句における ǰa'ura（間に）というのは、物理的・空間的なものの間であることは確かであるが、それは書き物 writing における位置を示すものであって、現実の生活世界における地理的場所を示してはいないということである。

本論で考察してきたように、英雄叙事詩で区切りとなる故郷帰還は秘史で3カ所（§250、§264、§273）あり、その３つで区切られた秘史は４つのパート（Ⅰ～Ⅳ）に分かれる。それゆえ、**ここで言うところの２つのシルギンチェク（詩句）とは、ⅢとⅣのパートを指している**と理解できる。上記で考察したように、秘史の構成のなかではⅡの結末で大きな転換点があるからである。ただし、この場合、§282はパートⅣから除外されることになる。すなわち、**§282はこの１節だけでパートⅤを構成している**ことになる。したがって、前述の秘史の形成のされ方は、Bの仮説すなわちチンギスとオゴデイの統治が組み合わされた２つのパートⅠとⅡが一緒に書かれ、その後パートⅢとⅣが個別に書かれたという仮説が妥当で、各パートが個別に書かれたという仮説を斥けることになる。ただし、このBの仮説もいま述べたように若干修正して、§282をパートⅣから除外しておかねばならない。言い換えれば、秘史の“第一の作者”はⅠとⅡを執筆した後に、“第二の作者”がⅢとⅣの“２つ”のパートを付け足して、最後にそれを秘史の最終節である§282に書き記して秘史の執筆を終えたということになる。前述のように、英雄叙事詩の作法においては、挿入や書き換えというような操作は禁じられている。“第二の作者”はこの作法をわきまえた上で、この末尾の文章を加えたということになる。

最初の見立てでは、パートⅢがグユク時代に「書かれた」ものであり、パートⅣがモンケ時代に「書かれた」ものであるとしていたが、グユクがオゴデイの息子（オゴデイ派）、モンケがトルイの息子（トルイ派）であるため、この２つの立場は相いれない。しかし、パートⅢが実際にはグユクの次のモンケ時代ー厳密にはモンケ以降ーに書かれていたとすると、パートⅣが実際に書かれたのがクビライ時代であってもアリク・ブカ時代であっても、どちらもトルイの息子であるから、この２つのパートが同一の人物によって書かれていても立場的な矛盾はない。

ただし、このトルイの息子のどちらを秘史の“作者”が想定していたのかということは、“コデエ・アラルの７つの丘”についての“７つの丘”を考察しつつ、§282の末尾が“終わった”と叙述していることから判断できるように思われる。それゆえ、次節においてはこの表現を考察することにしたい。

4.2　Kelüren-ü Köde'e_aral（ケルレンのコデエ・アラル）の解釈ーDolo'an_boldaq-aとの関連でー

“コデエ・アラルの７つの丘”という表現であるが、まずは、コデエ・アラルという地名が出現する秘史の箇所を考察してみたい。コデエ・アラルという地名は秘史で3回現れる。1回目は巻4§136、2回目は続集巻2§269、最後の3回目がこの§282である。この3回のコデエの綴りがなぜかすべて異なっているのであるが（1回目はKödö'e，2回目はKöde'ü，3回目はKöde'e）、ここでは同じものとして扱う。

まず、最初のコデエ・アラルが出現している§136の文脈を確認しておきたい。当該節ではチンギスがジュルキン族のサチャ・ベキとタイチュを抹殺する内容が叙述されている。ここでは§136の一部のみ抜粋しておく（栗林均・确精扎布編　2001：174）。

04:19:08 Činggis_qahan Jürkin-ṭür morila=bai. Jürkin-i
チンギス・カンはジュルキンに出征した。ジュルキンを
04:19: 09 Kelüren-ü *Ködö'e_aral*-un Dolo'an bolda'ut-ta
ケルレンのコデエ・アラル（川中島）のドローン・ボルドート（7 つの丘）に
04:19:10 bü=küi-ṭür irgen in-u dawuli=bai. Sača_beki
いるときに、その人々を略奪した。サチャ・ベキと
04:20:01 Taiču qoyar čö'en be[ye]s-iyen duta'a=bai.
タイチュの二人は少数の者たちと逃げた。

上記のジュルキンというのは、秘史の巻 4 § 139（パート I に含まれている）によると、モンゴルの初代君主のカブル・カアンの長子オキン・バルカクの子ソルカト・ジュルキの子孫たちのことである[14]。コデエ・アラル（川中島）のドローン・ボルドート（7 つの丘）というのは、この叙述に基づくと、これらジュルキン集団の本拠地だったと理解される。

コデエ・アラルが出現する 2 回目は、続集巻二 § 269（パートⅢに含まれている）である。ここにおいては、オゴデイが正式にモンゴル君主として戴冠されたことに言及されている節である。冒頭からの数行を以下に引用しておく。ちなみに、この § 269 は、チンギスの死に言及されている § 268 にすぐ後続する節となっている（栗林均・确精扎布編　2001：570）。

12:13:07 quluqana ǰil Ča’adai Batu teri'üten bara'un qar-un kö'üt
鼠の年、チャアダイとバトゥをはじめとする右翼の王子たち、
12:13:08 Otčigin_noyan Yegü Yisünge teri'üten ǰewün qar-un kö’üt
オトチギン・ノヤン、イェグゥ、イスンゲをはじめとする左翼の王子たち、
12:13:09 Tolui teri'üten qol kö’üt ökit güreget tümed-ün
トルイをはじめとする中軍の王子や王女、婿たち、万戸の、
12:13:10 minqad-un noyat bürin bol=ǰu *Kelüren-ü Köde’ü_aral*-a
千戸の長官たちがすべてそろい、*ケルレンのコデエ・アラルで*
12: 14:01 gür-iyer quri=ǰu Činggis_qahan-nu nereyid=ü=ksen mün
あまねく集まり、チンギス・カンの指名した、まさに
12:14 :02 ǰarlig-iyar Ögödei_qahan-ni qan ergü=bei .
勅令にしたがって、オゴデイがカンに推戴された。

ここでは、オゴデイが正式なモンゴル君主として推戴されたことが明確に言及されており、その推戴がコデエ・アラルで行われたと叙述されている。§ 282（＝パートⅤ）ではコデエ・アラルでカアンに推戴された点でモンケが暗示されているようにも思われるが、アリク・ブカの

推戴も非明示的に意識されているようにも思われる[15]。いずれにしても、この§269の冒頭の子（鼠）の年は§282の子の年と対応関係にあることが理解される。

このように、コデエ・アラルが出現する箇所の3つのうちの最後の2つが対応関係にあるとすると、最初のジュルキン集団について語られるコデエ・アラルはどのような意味をもつのかということが気になる。

コデエ・アラルが秘史の最終節で重要視されることの意味を検討する場合、最初の事例のコデエ・アラルと共起しているDolo'an bolda'ut（ドローン・ボルドート）すなわち“7つの丘”が3番目の§282におけるKöde'e_aral-un Dolo'an_boldaq-a（コデエ・アラルの7つの丘）と対応関係にあることは明らかである。ちなみに、2番目のコデエ・アラルの出現箇所には“7つの丘”は共起していない。つまり、第2の箇所と第3の箇所が対応関係にあり、第3の箇所が第1の箇所と対応関係にあるので、3つの箇所は最終的に互いに関連していることになる。

注目すべき点は、1番目の巻4§136での“7つの丘”の“丘”は複数形のbolda'utになっているのに対して、この秘史最終章の§282では“丘”が単数形のboldaqになっていることである。これは間違いではなく、次のような意味が非明示的意味としてあったのではないかと考えられる。すなわち、複数形として現れるジュルキンの故地としての“丘”が複数形になっているほうのDolo'an bolda'ut（ドローン・ボルドート）は地名であるが、§282の“丘”が単数形になっているほうのDolo'an_boldaq-a（ドローン・ボルダク）は、**明示的には地名を指しつつも、非明示的に「7人が常になっているところに」を意味しうる**からである。つまり、Dolo'an_boldaq-a（7つの丘）のboldaqを“丘”という意味ではなく、「～になる」という意味の動詞bol-の現在・未来を表す形動詞形-daγと解釈するのである。

つまり、コデエ・アラルはモンゴルの君主をはじめて輩出したカブル・カアンを暗示しうるのである。秘史でカウントされているモンゴル君主はこの**カブル・カアンを初代として、アムバガイ、クトゥラ、チンギス、オゴデイ、グユク—否定的にではあれ君主としてカウントされていると考えられる—、モンケ—間接的ではあるがグユクと対比される形でカウントされている—の7人**である[16]。

すなわち、§282ではモンケの次の君主が想定されていることが理解される。このことは、本論のこれまでの考察に符合している。史実においては、モンケの次の君主はクビライである。しかし、§282の文には主語が欠落しており、この欠落した主語は、史実に従えば、モンケの次の君主クビライの名前が入るべき箇所である。しかし、ここで主語が欠落しているのは、クビライではなく、クビライに敗北したアリク・ブカのほうを非明示的に示そうとしたためではないかと考えられる。なぜならば、§282の結末の語が“終わった”という語だからである。史実として“終わった”のはアリク・ブカであって、クビライではなかったからである。

アリク・ブカは本来であれば8人目の君主になるはずであったが、クビライに敗北した。しかし、敗北したとしても、正統性がアリク・ブカのほうにあることを、これら歴代のモンゴル君主がモンゴル君主に推戴されてきた父祖の地コデエ・アラルの名前に言及することによって、

さらには、“７つの丘”に言及することによって主張したのだと推測される。むろん、歴代カアンの推戴は必ずしもコデエ・アラルでおこなわれてきたわけではなかった。モンゴル帝国時代前期から元朝一代を通じて、コデエ・アラルで大クリルタイが開かれたのは前後三回で、第一回は1228年戊子のクリルタイ、次はモンケの選挙をめぐる1252年の壬子のクリルタイ、そして最後は泰定帝が即位した1324年のクリルタイであった（村上　1976：395-396）。

以上の議論に基づくと、この§282 の主語がアリク・ブカであることは明らかである。鼠の年の1264年にクビライとアリク・ブカの帝位争いはアリク・ブカの投降によって終わったという歴史的な事実を考慮に入れると、**この§282の子の年は1264年の子の年を表している**ことになる[17]。

アリク・ブカはクビライに投降したが、このコデエ・アラルに彼を支持する人々が集結したことで彼の正統性は示せた。人々が集結したというのは実際のことであったとも、比喩とも解釈しうる。とはいえ、ここで意図していることは、アリク・ブカの正統性の主張である。そして、この正統性の主張はカアン位への就任と同義ではなく、アリク・ブカは正統性があったにもかかわらず彼の政治的命運は尽きた[18]。これに基づけば、§282の末尾の動詞は通常、biči=jü dawus=ba（書き終わった）というように、秘史という書き物が書き終えられた年と理解されているが、実際は、この二つの動詞を切り離して、dawus=ba（終わった）という述語の動詞に対応する主語として、アリク・ブカを想定するほうが重要ではないかと考えられる。なぜなら、この鼠の年の重要性は“作者”よりもモンゴル君主のほうに決定的な意味があったと思われるからである。

ただし、biči=jü dawus=ba（書き終わった）を一つの表現として考える場合、これに対応する主語はアリク・ブカではなく、秘史の“作者”であると読むのが妥当である。おそらく、この場合の解釈は二者択一ではなく、末尾の主語が隠された背景には、アリク・ブカと秘史の“作者”の二人を同時に暗示させようとする意図があったのだと考えられる。

さらに、§282には非明示的にアリク・ブカの政治生命が終わったことが叙述されているとすると、この事実が書けるためには、アリク・ブカがクビライに投降したことを知っていなければならない。それゆえ§282（＝パートⅤ）が実際に書かれたのはクビライ時代以降ということになる。

表１：“秘史の各パート”と“英雄叙事詩的設定”と“実際に書かれた時代”との対応関係

パート	該当節	英雄叙事詩的設定	実際に書かれた時代
Ⅰ	§１～§250	チンギス	オゴデイ以降
Ⅱ	§251～§264	オゴデイ	グユク以降
Ⅲ	§265～§273	グユク	モンケ以降
Ⅳ	§274～§281	モンケ	アリク・ブカ以降

V	§282	アリク・ブカ	クビライ以降

以上の議論をまとめると、パートⅠからパートⅤは表１のように整理することができる。灰色でハイライトしたパートⅢとパートⅣが§282に言及されている２つのシルギンチェク（詩句）である。

4.3　§264と§282の対応関係

重要なので繰り返すと、秘史の叙述はパートⅡの終わりまでが一つの区切りで、パートⅢとパートⅣが２つのシルギンチェク（詩句）として後で付加されて、最後の§282（＝パートⅤ）でその付け加えられたことが非明示的に言及されている。このように考えると、秘史の“作者”は２人いたと考えるのが妥当である。この２人の“作者”のことを、本論では“第一の作者”“第二の作者”と呼んでおく。この場合、秘史の“第二の作者”が書き加え始めたときの秘史の末尾は§264であったことになる。この§264を意識しながら、“第二の作者”は最後の節§282を書いた可能性が高い。以下においては、このことを２つの節を対比させながら示すことにしたい。

繰り返しになるが重要な箇所であるので、§264の末尾の文を次に再掲する。次の文章は§282との比較のため、文章を①~⑦まで区切って示す。それゆえ、文末以外はコンマを付しておく。また、後続の議論に先立って、§264とは対応関係にない箇所を斜体にしておく（栗林均・确精扎布編　2001：556）。

〔264〕

11:52:06 ①tende *Činggis_qahan* qari =ǰu,　②ǰa'ura,　③Erdiš-i ǰusa=ǰu,

11:52:07 ④dolodu'ar hon,　⑤ takiya ǰil namur,　⑥Tūla-yin Qara_tün-ne,

11:52:08 ⑦ordos-ṭur bawu=bai.

上記の内容は、次のように整理できる。①は主人公の帰還したことの表示，②は「途中で」という意味を表す副詞*ǰa'ura*、③は何をしたかを表す動詞、④は“７”を用いた年の表示、⑤は十二支を用いた年の表示、⑥は帰還場所の表示、そして⑦はオルドがあった場所に下営したことである。

次に§282を上記の§264との対比関係で示すと、次のようになる（栗林均・确精扎布編2001：614）。

[282]

12:58:05　①yeke qurilta quri=ǰu,　⑤quluqana ǰil quran sara-da,

12:58:06　⑥Kelüren-ü Köde'ü_aral-un,　④Dolo'an_boldaq-a,　*Šilginček*

12:58:07　*qoyar*,　②ǰa'ura,　⑦ordos bawu=ǰu bü=qüi-ṭür,　③biči=ǰü dawus=ba .

§264の①に対応している語は、§282でも最初に配置されている。ただし、「大集会を開い

て」とあり帰還とはなっていない。しかし、yeke quril（大集会）-ta（～に），quri=ǰu（集まって）というように、§264 の帰還の部分と同じ構文になっている点は注目しうる。むろん、この qurilta は 1 語として読むのが慣例であり、あくまでも非明示的な意味での読み方である。ここでは、§264 では qari =ǰu、ここでは quri=ǰu というように、音的な類似の対応関係もあることを指摘しておきたい。

§264 の②に対応する語は、§282 では異なる位置にあるが、同じ単語 *ǰa'ura*（間に）が用いられている。出現する位置が異なっているとはいえ、同じ用法で用いられていることは重要である。なぜなら、**§282 の *ǰa'ura* は、§264 の *ǰa'ura* が「途中に」「途中で」というように一語単独で用いられているように、§282 における *ǰa'ura* もまた、「途中に」や「途中で」というように単独で用いられていることを暗示しうる**からである。このことは、この *ǰa'ura* を「シルギンチェクと？という二つの間に」と読むべきではないと解釈した前述の考察と符合している。

§264 の③に対応する語は、§282 では異なる位置にあるが、②の *ǰa'ura*（間で）何をしたかということが書かれている点で対応関係にある。ここで§264 との対応関係に含めなかった Šilginček qoyar（詩の区切りの２つ）は、§282 の biči=ǰü dawus=ba（書き終わった）という動詞の目的語であると読める。

§264 の④に対応する語は、§282 では異なる位置にあるが、どちらも数字の“７”を用いている点が対応関係にあるだけでなく、数字も完全に一致している。

§264 の⑤に対応する語は、§282 では異なる位置にあるが、どちらも十二支で記された年である点で対応関係にある。

§264 の⑥に対応する語は、§282 では異なる位置にあるが、オルドが宿営した地理的場所を示している点で対応関係にある。

§264 の⑦に対応する語は、§282 では異なる位置にあるが、オルドが宿営したという内容で一致している。

以下においては、この 2 つの節（§264 と§282）の対応関係をさらに補強しておきたい。

それは、qurilta（王侯会議）の-ta を表す漢字が“塔”となっていることである。一般に、「王侯会議」を意味するクリルタイ qurilta は一語として読まれているが、§282 の①yeke qurilta quri=ǰu の qurilta（大集会ーに）の-ta を与位格として読んだ場合、-ta（～に）を表す漢字が“塔”となっていることは注意を引く。なぜなら、§264 の⑤ *takiya* ǰil namur（酉年の秋）の *takiya* ǰil（酉年）の *takiya*（酉）の ta-という漢字もまた“塔”と記されているからである。秘史において *takiya* ǰil（酉年）は 2 度しか現れない。1 度目はジャムカが即した年として現れる（巻 4 §141）。そして 2 度目がこの§264 における事例である。

ジャムカが即位した *takiya* ǰil（酉年）は秘史で初めて十二支で表記されはじめる最初の年である点で重要である。そして、その年はなぜかチンギス・カンに最終的に敗北するジャムカの即位年を表示するさいに用いられている。ジャムカは秘史の “作者”（ “第一の作者”と考えられる）の傾倒する人間であったから、このジャムカの即位の年がはじめて秘史に記されたの

は、とくに驚くべきことではない。クビライに敗北したアリク・ブカは、チンギス（勝者）vs ジャムカ（勝者）のジャムカの側に重ね合わされる。すなわち、クビライ（勝者）ｖｓアリク・ブカ（敗者）となる。それゆえ、ジャムカが即位した年 takiya jil（酉年）の最初の ta の漢字が“塔”となっていることは、秘史末尾の§282 における大集会の行なわれた場所を示す与位格「～に」を表す ta と同じ漢字“塔”となっていることは意味のあることである（ただし、非明示的な読み方である）。

それだけではない。チンギスに敗北した人物が即位した年 takiya jil（酉年）の最初の ta の漢字が、秘史末尾の§282 における大集会の行なわれた場所を示す与位格「～に」を表す ta と同じ漢字“塔”となっていることの意味は深い。なぜなら、この漢字“塔”は明示的には「タワー」であるが、この漢字の部位を見ると、“土と草を合わせたところ”となっているからである。すなわち、これは“草原”を非明示的に示している。アリク・ブカはクビライとの対比でいえば、その居所の対比が草原（アリク・ブカ）ｖｓ非草原地帯（クビライ）ということになるからである。この指摘は、§282 で明示的に帰還場所が示されていないことを補う点で重要であろう。“草原”は“非草原”と対比されるかぎり、充分に帰還の場所としての意味を持ちうるからである。この場合、君主も季節ごとに移動していたわけであるので、帰還場所とは厳密に言うと、君主のオルドがあるところであり[19]、これが“故郷”と呼べるものといえる。したがって、§282 の末尾は一見、他の区切り地点とは異なって故郷への帰還の叙述がないように見えているが、実際には存在しているということになる[20]。

以上をみると、§264 と§282 の対応関係は明瞭である。それゆえ、むしろ対応関係にない箇所が気になってくる。この場合、対応関係がない箇所はただ一箇所で、それは、§264 の主語がチンギス・カンであるのに対して、§282 の主語が欠落していることである。これについてはすでに前述したとおり、非明示的に、アリク・ブカを指していると同時に、秘史の“作者”を指しているものと考えられる。

４．４　秘史における二人の作者－“第一の作者”と“第二の作者”－

以上の考察に基づくと、“第二の作者”は“第一の作者”が最後に執筆した§264 を見ながら、§282 を書いたと考えられる。この“作者”の候補として、拙論でバアリンのナヤアという人物が挙げうることについて指摘したことがある（藤井　2013：55－67）。秘史の地の文（会話以外の文）には、「我々の兵士たち」というような“作者”の存在を暗示させる表現が出現している。そしてこの表現はサアリ・ケエルという地名としばしば共起している。この事実に基づき秘史でサアリ・ケエルという語が出現する箇所を全て取り上げて考察したのである[21]。

詳細は拙論に譲るが、この“作者”と密接に関連しているサアリ・ケエルでバアリン集団のナヤアが登場していることを重視し、ナヤアと“作者”を同一視できることを論じた。拙論に基づくと、ナヤアはもともとチンギスと敵対するタイチウド陣営に属していたが、チンギス陣営に帰順した人物であると考えられる。しかも、ナヤアはタイチウド陣営がチンギスに滅ぼさ

れるはるか以前にチンギス陣営に帰順していたと考えられる。にも関わらず、タイチウドの主君であるタルクタイ・キリルトクに最後まで尽くして後にチンギスに帰順したというような叙述の操作がおこなわれている。これは忠義性にこだわったために引き起こされたと考えられる。

サアリ・ケエルは、本論で指摘した最初の区切れ地点である§250 でチンギスが故郷に帰還する場所として現れている。これに関連して興味深いことを指摘しておきたい。前述したように、第１の区切れ地点§250 は前の２つの節（§248 と§249）の要約になっており、これら３つの節は相互に密接にかかわっている。それだけでなく、§248 には“作者”の存在を強力に示唆する“我々”表現が観察され、さらに§248 と§249 を要約する§250 で“サアリ・ケエル”という地名が現われている。つまり、パートⅠの結末はチンギスの帰還であるだけでなく、“作者”の帰還でもあることが暗示されているのである。

「我々の兵士たち」というような“我々”表現について重要な指摘をしておくと、こうした表現は巻３§110～続集巻１の§263 まで現れており、この最後の§263 と連動している次の節§264 は、本論で論じた第 2 の区切れ地点である。つまり、第 2 の区切れ地点ではチンギスがカラ・トゥンに帰還しているが、ここにはチンギスだけでなく、“作者”も一緒に帰還しているということが暗示されている。この点、パートⅢの各末尾では“作者”の存在を暗示する“我々”表現が欠落しているので、“第二の作者”がオゴデイと共にカラコルムに帰還したかどうかは不明である。この点でもパートⅡとパートⅢに質的な差異が認められる（表 2 参照）。

表 2：故郷への帰還に関わる“作者”の状況

箇所	該当節	帰還場所	明示的主人公（モンゴル君主）	主人公と共に帰還した、あるいは一緒にいたと考えられる秘史の“作者”
Ⅰの末節	§250	サアリ・ケエル	チンギス	“第一の作者”＝ナヤア
Ⅱの末節	§264	カラ・トゥン	チンギス	“第一の作者”＝ナヤア
Ⅲの末節	§273	カラコルム	オゴデイ	？
Ⅳの末節	§281	なし	オゴデイ	？
Ⅴ	§282	コデエ・アラル	言及なし	“第二の作者”＝シギ・クトゥク

前述のように、“作者”は中央アジアのヤラワチやマスウドのような行政官の生き方に感銘を受けて、奉仕する君主が誰であろうと構わないという心境に達したと考えられるため（それゆえ地の文での“我々”表現が§263 で最後の事例になっている）、ナヤアにはこの§264 より後の秘史を書く動機が失われていると想像できる。それゆえ、ナヤアは最初のパートⅠとパートⅡの２つのパートを書き、秘史の“第一の作者”となったと考えることができる。

ナヤアの書いた最後の節である§264 と、“第二の作者”が最後に書いた§282 が上記のように緊密に呼応していることを見ると、この“第二の作者”がナヤアと極めて近しかった人物で

あったとしても不思議はない。そうした人物として考えられるのは、シギ・クトゥクである[22]。“第一の作者”のナヤアはチンギス陣営の「我々」に混じり、シギ・クトゥクを拾っている[23]。ナヤアはもともとチンギスのライバルであったジャムカに共感していたが、ジャムカの死後、ジャムカの代わりにシギ・クトゥクに共感を寄せるようになった（藤井　2019：109－137）。**秘史においてタタル集団が終始一貫して肯定的な立場から書かれていることは、この二人が秘史の“作者”であるなら符合している。シギ・クトゥクはタタル出身だからであり、そのタタル出身のシギ・クトゥクを見出したのがナヤアだから**である[24]。

これに関連して指摘しておきたいのは、シギ・クトゥクが書き始めたと考えられるパートⅢは、チンギスの死をめぐる叙述から始まっているが、この箇所はチンギスを最終的に殺害した可能性のあるタタル出身のイェスイ妃を一貫して擁護するかたちで書かれていることである（藤井　2023）。シギ・クトゥクであれば、タブーであったと考えられるチンギスの死を叙述できたであろうし、彼自身がタタル出身者であったため、同じくタタル出身のイェスイ后を擁護する立場で秘史を叙述したことは不思議ではない。

もう一つこれに関連して指摘しておくべきことは、詳細は拙論に譲るが、ナヤアとシギ・クトゥクはいわば疑似的な親子関係として想定されていることである（藤井　2019）。これに基づくと、シギ・クトゥクはナヤアから英雄叙事詩の作法についての教えを受けることができたと推測できる。であるならば、シギ・クトゥクなら、上記で考察した§282をナヤアの書き終えた§264を参照にしながら書くことができたであろう。そのさいに、モンゴル英雄叙事詩が変更や挿入を許さないということを理解していたので、コロフォンの§282ではナヤアの書いた箇所に２つのパートを増やして書き終えたことを非明示的に織り込んだのではないかと推測できる。

前述の「草原」を暗示しているとした“塔”は、タタルを表す漢字“塔塔児”にも用いられていることも指摘しておくべきだろう。この場合、“塔”が連続しているため“塔”が強調されており、タタルは草原の遊牧集団の代表格として暗示されることになる。草原（アリク・ブカ）ｖｓ非草原地帯（クビライ）の草原側にはシギ・クトゥクもいたということになる[25]。

ただし、ナヤアが書いたと想定されるパートⅠとパートⅡに、シギ・クトゥクの関与が全くなかったとは断定できない。なぜなら、ナヤアはジャムカの死後にシギ・クトゥクに共感するようになったと考えられるからである（藤井　2019）。事実、ジャムカの死（巻8§201）より後の秘史の叙述には組織や制度に関する内容が増えているからである。むろん、ジャムカの死が叙述される§201の次の節にはチンギスの即位が叙述されているため、そうした叙述は帝国の建設上において必然的なものであるといえなくもない。ただ、“第二の作者”が“第一の作者”のパートに関与したことがあったとしても、それはあくまでも補助的なものであったと考えられる。その傍証となっているのが、§282における２つのシルギンチェクを書いて秘史を終えたという内容である。もしもパートⅠに“第二の作者”シギ・クトゥクが積極的に関与していたのであれば、こうした但し書きは不要であったと思われるからである。

これに関連して付言すべきことは、パートⅠにおける“我々”表現がナヤアとシギ・クトゥクの両者を指示していた可能性は低そうだということである。なぜなら、“我々”表現には、シギ・クトゥクを含まない用法が観察されるからである。すなわち、巻4§135では、“我々の兵士たち”がタタルの宿営地に残されていたシギ・クトゥクを拾ってチンギスの生母ホエルンに贈り物として献上したという叙述が見えるからである。

ちなみに、逆のパターンすなわち“第一の作者”が“第二の作者”のパートに関与したことは考えにくい。前述したように、“第一の作者”は支配者が誰であろうと彼自身の生き方は左右されないという境地に達し、パートⅡよりも後を書く動機がなくなっているからである。実際、“我々”表現がパートⅡで消失しているのはこのことを傍証している。ちなみに、本論でも関係しているオゴデイ派とトルイ派の抗争についていえば、ナヤアとシギ・クトゥクは中央アジア遠征におけるチンギスの振る舞いが原因で彼らの忠誠心はチンギスからオゴデイに移った可能性がある（藤井　2019：109－137）。この点も、彼らが最初オゴデイ派であったことを示している。

それゆえ、オゴデイ派とトルイ派の抗争が起きたとき、ナヤアとシギ・クトゥクは政治的に厳しい状況に置かれることになったと推測される。とはいえ、パートⅢの内容すなわちトルイの自己犠牲の強調→オゴデイの権威の低下→“英雄叙事詩的設定”としてのグユク時代→実際にはモンケ時代以降に書かれたという内容を見ると、シギ・クトゥクがトルイ派に転向したことは明らかであろう。それゆえ、パートⅣ（“英雄叙事詩的設定”としてのモンケ時代）においてグユクについての叙述が否定的なのに対して、モンケには肯定的になっているのであろう。ただし、モンケについての積極的な叙述はないことは、おそらくシギ・クトゥクがオゴデイ派からモンケ派に転向したことと関係している。秘史がオゴデイ時代で終わっていることも、この秘史の“作者”の転向の問題と関係している。すなわち、グユクを否定しモンケを肯定するという立場を矛盾なく成立させるためには、明示的にグユクとモンケの推戴のどちらにも触れないものの、前者を否定して後者を否定しないでおくという叙述に留める必要があったのではないだろうか。

本論では、英雄叙事詩として秘史を位置付け、主人公の故郷への帰還に基づいて、叙述の区切れ地点を特定して論じてきた。最終節§282における、この“故郷”とはコデエ・アラルであり、この場所にアリク・ブカ側の人間が集ったことが、すなわち、故郷への帰還に匹敵することになる（前述のように比喩の可能性がある）。シギ・クトゥクはアリク・ブカ側に立ち、彼の正統性を非明示的に秘史に織り込んで、ナヤアが書いた最終節§264 より後の部分を書き足して秘史を終えたということになる。むろん、彼もまたアリク・ブカと同様に、政治的命運が尽きたことは言うまでもない。彼もまた、biči=jü dawus=ba（書き終わった）だけでなく、アリク・ブカもろともクビライに投降して dawus=ba（終わった）に違いない。

5. 結論と今後の課題

5.1　結論

本論文では、モンゴルの英雄叙事詩の要素を用いて秘史の構造と叙述を解析し、以下の重要な点を明らかにした。

１）秘史の構造

英雄叙事詩の構造に基づき、秘史は４つのパートに分けられ、それぞれがモンゴル帝国の異なる時代を反映している。これらのパートは故郷への帰還を描写する箇所を基に区切られる。

２）英雄叙事詩的設定と実際の時代

各パートの“英雄叙事詩的設定”と実際に書かれた時代にはずれがある。

３）コロフォン§282と§264の重要性

特に注目すべきは最終節§282 の分析で、この節が秘史の成立に関する重要な手がかりを提供しており、特に§264との関連性が浮かび上がる。

４）秘史の“作者”

“第一の作者”と“第二の作者”の存在が推測され、彼らの個々の視点と時代背景が秘史の叙述に影響を与えた可能性がある。

以下、上記についてもう少し詳細にまとめる。

１）について：

秘史は４つのパートから成り立っており、それぞれ異なる時期の出来事を扱っている。パートⅠでは、チンギスの権威が確立された時期に焦点が当てられ、その時代に「書かれた」可能性があることが指摘される。パートⅡでは、オゴデイが後継者に選出された出来事が重要視され、オゴデイ時代に「書かれた」ものだと推測される。

しかし、パートⅢではオゴデイの権威が強調されつつも、トルイがオゴデイの身代わりになるエピソードが語られ、オゴデイの権威が逆説的に揺らいでいる可能性が指摘される。したがって、この部分はオゴデイの息子グユクの時代に「書かれた」可能性があることが示唆される。

パートⅣでは、グユクが否定されモンケが否定されずにいるエピソードが系譜において重要であるとし、この部分がトルイの息子モンケの時代に「書かれた」可能性が指摘される。

さらに、モンゴル英雄叙事詩では世代をまたぐ主人公が登場することがあるため、これに基づいてパートⅠからⅣが作成された過程としては４つのパターンが考えられる。

最後に、パートⅡの末尾では、秘史の“作者”が中央アジアの行政官たちの生き方に影響を受け、忠義に関する考え方を変化させたことが強調され、叙述の転換点があるとされる。つまり、秘史はパートⅠからⅣで構成され、パートⅡの末尾で一つの叙述の転換点がある。結局、秘史の構成は以下の２つの選択肢に絞られる：

1.　各パートが独立して作成された可能性。
2.　パートⅠとⅡが一緒に作成され、その後ⅢとⅣが別々に作成された可能性。

２）について：

秘史の「書かれた」年代設定は“英雄叙事詩的設定”で、実際に書かれた時代とはずれてい

る可能性がある。例えば、パートⅠの最後に西夏に触れている箇所は、チンギスの死について知っていなければ書けないため、チンギス時代ではなくオゴデイ時代以降に書かれた可能性が高い。同様に、パートⅡはオゴデイではなくグユク時代以降に書かれた可能性があり、パートⅢはグユクではなくモンケ時代以降に書かれた可能性が高い。最後に、パートⅣはモンケ時代の次の時代以降に書かれた可能性を示唆しており、これはアリク・ブカかクビライの時代を指している可能性がある。

秘史のパートⅣが書かれた時代の上限が明確になるのは、最終章である§282 の非明示的な内容を通じてである。§282 において、「コデエ・アラルの 7 つの丘のシルギンチェクと...2 つの間に」という句は、これまで地理的な場所を指すものと解釈されてきた。しかし、実際には“シルギンチェク”という言葉は詩の区切りを指しており、地名ではないと考えられる。この句は「2 つのシルギンチェク（詩句）を間に」と読み替えることが可能である。この“2 つ”とは、秘史の構成を考察する際に提案された（Ⅰ+Ⅱ）+Ⅲ+Ⅳという仮説と一致している。すなわち、これら 2 つの詩句は、パートⅢとパートⅣを指している。この解釈により、パートⅣはコロフォンの§282 を含まず、§282 は独立したパートⅤを形成すると考えられる。重要なのは、このシルギンチェクの解釈から、パートⅢとパートⅣが同一の“作者”によって書かれ、最終的にこの人物がパートⅤを完成させて秘史を締めくくったことが明らかになる点である。

“英雄叙事詩的設定”として提示した最初の仮説では、パートⅢはグユクの時代に、パートⅣはモンケの時代にそれぞれ書かれたと推測した。しかし、グユクはオゴデイの息子であり、モンケはトルイの息子である。オゴデイ派ｖｓトルイ派という歴史的な事情を考慮に入れると、これら 2 つの部分が同一の人物によって書かれたとするには若干の違和感がある。しかし、実際の書かれた時代を考慮すると、パートⅢはモンケの時代（厳密には以降）に、パートⅣはクビライまたはアリク・ブカの時代（厳密には以降）に書かれた可能性がある。これらの人物はいずれもトルイの息子であるため、同一の“作者”による書き物であるとしても矛盾はない。

さらに、「コデエ・アラルの 7 つの丘」という句は、非明示的にモンゴルの 7 人の君主を指していると解釈できる。これらはカブル、アムバガイ、クトゥラ、チンギス、オゴデイ、グユク、モンケの 7 人である。アリク・ブカは 8 代目のカアンになる予定だったが[26]、クビライに敗れた。最終的なパートⅤには、アリク・ブカの政治生命の終わりが暗示されていることを踏まえると、この事実を記述するためには、アリク・ブカがクビライに投降したことを知っている必要がある。したがって、パートⅤが実際に書かれたのは、アリク・ブカの時代ではなく、彼の政治生命が終わった後、つまりクビライの時代以降であると考えられる。そのため、§282 に記された「子（鼠）の年」は、アリク・ブカがクビライに投降した 1264 年と解釈される。

３）について：

秘史の分析から、その叙述には明確な区切りがあり、パートⅡの終わりをもって一区切りとなっていることが示されている。この区切りの後、パートⅢとパートⅣがシルギンチェク（詩句）として追加され、最終節であるパートⅤ（§282）にてこれらの追加が非明示的に言及され

ている。この構造から、秘史には2人の異なる“作者”が関与していたことが推測される。これらは“第一の作者”と“第二の作者”として定義され、特に“第二の作者”は秘史の最後の節§282を、先行する§264を意識しながら書いた可能性が高い。§264と§282の対比分析を通じて、両節間の言葉の類似点や対応関係が明らかにされ、特に§282 では主語の欠落が見られ、これは非明示的にアリク・ブカと秘史の“作者”を指していると解釈される。また、漢字“塔”の使用に関する分析から、秘史の最終的なメッセージはアリク・ブカとクビライの対比を示唆していると考えられる。このように秘史は複数の“作者”によって異なる時期に書かれ、その叙述は深い対比関係と暗示を含む複雑な構造を持っていることが示される。

４）について：

以上の考察により、秘史には2人の作者が存在すると考えられることが明らかになる。パートⅠとパートⅡを記した“第一の作者”は、パートⅡの最終節である§264 で忠義に関する考え方を大きく変え、そこで秘史を一旦終えた。続いて、“第二の作者”がパートⅢとパートⅣの2つのシルギンチェク（詩句）を書き、最終的にパートⅤを執筆して秘史を完結させた。

“第二の作者”は、第Ⅰ部の最終節§264を参照しながら第Ⅴ部の§282を記したと考えられることは、“第一の作者”の考え方を“第二の作者”が深く理解していたことを示唆しており、“第一の作者”と“第二の作者”の間には密接な関係があった考えても不思議はない。筆者の拙論では、秘史の大部分を執筆したとされるバアリン集団のナヤアを“第一の作者”として挙げているが、もしこれが正しいならば、“第二の作者”はナヤアが比喩的に「自分の子ども」と見なしていたシギ・クトゥクである可能性が高いと指摘した。そして、§282では§264とは異なり、主語が欠落しているが、この隠された主語はアリク・ブカとシギ・クトゥクの2人を暗示しているとした。

以下の表3は、秘史の4つのパート、“英雄叙事詩的設定”、実際に書かれた時代、そして“作者”との関連をまとめたものである。

表3：秘史における“英雄叙事詩的設定”と実際に書かれた時代、及び“作者”の対応関係

パート	該当節	英雄叙事詩的時代設定	実際に書かれた時代	秘史の “作者”
Ⅰ	§1～§250	チンギス	オゴデイ以降	“第一の作者”＝ナヤア（+“第二の作者”？）
Ⅱ	§251～§264	オゴデイ	グユク以降	
Ⅲ	§265～§273	グユク	モンケ以降	“第二の作者”＝シギ・クトゥク
Ⅳ	§274～281	モンケ	アリク・ブカ以降	
Ⅴ	§282	アリク・ブカ	クビライ以降	

表3におけるパートⅢとパートⅣで考察した“英雄叙事詩的設定”と実際に書かれた時代は、どちらも非明示的なものである。具体的には、パートⅢの叙述はチンギスとオゴデイの2つの

時代にまたがり、パートⅣに関しては秘史の明示的な叙述はオゴデイ時代に関連している。それゆえ、これらの明示的レベルの時代も含めて表４に秘史の全体構造をまとめておく。

表 4：秘史の全体構造

パート	該当節	秘史に叙述されている時代の君主（明示的）	英雄叙事詩的時代設定（非明示的）	実際に書かれた時代（非明示的）	秘史の“作者”
Ⅰ	§１～§250	チンギス（主として）	チンギス	オゴデイ以降	“第一の作者”＝ナヤア（+“第二の作者”？）
Ⅱ	§251～§264	チンギス	オゴデイ	グユク以降	
Ⅲ	§265～§273	チンギス・オゴデイ	グユク	モンケ以降	“第二の作者”＝シギ・クトゥク
Ⅳ	§274～281	オゴデイ	モンケ	アリク・ブカ以降	
Ⅴ	§282	言及なし	アリク・ブカ	クビライ以降	

秘史が明示的にオゴデイ時代で終わっていることは、“第二の作者”のオゴデイ派からモンケ派への転向と関連していると考えられる。このため、グユクを否定しモンケを肯定する叙述が必要であった。“第二の作者”であるシギ・クトゥクはアリク・ブカ陣営にいて、彼のクビライへの投降を見届けた後に秘史を完成させたと考えられる。秘史の最終節は、いずれかの皇帝の即位のクリルタイが暗示されているものの、モンケの後継者アリク・ブカのクビライへの投降という正反対の非明示的意味が含まれている。この点で、明示的な内容と非明示的な内容が正反対となるモンゴル英雄叙事詩の特徴を示す終わり方になっているといえる。

5.2　今後の課題

今後の課題としては、１）“英雄叙事詩的設定”概念の精緻化、２）秘史におけるオルド概念の検討（本論の注 19 を参照）、３）“塔”という漢字表記の全体的検討（本論の注 20 と 25 を参照），そして４）本論の枠組みの史実的な検証といえる[27]。

引用文献

【日本語】

小沢重男（1989）『元朝秘史全釈続攷（下）』風間書房

栗林均・确精扎布編（2001）『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引』東北アジア研究センター叢書第 4 号 東北大学

白石典之（2015）「第 9 章　チンギス・カン時代の住生活」『チンギス・カンとその時代』（白石編）勉誠出版，206-217 頁

杉山正明（1996）『モンゴル帝国の興亡〈上〉』講談社現代新書

杉山正明（2008）「第五章　モンゴルと中東」『モンゴル帝国と長いその後』（興亡の世界史 09）

講談社，178-218 頁
藤井真湖（2011）「『元朝秘史』の地の文における“我々”表現に隠された意図：巻 3 第 110 節～巻 11 第 263 節における一人称複数形についての考察」『現代社会研究科研究報告』7 号愛知淑徳大学大学院現代社会研究科　45-66 頁
藤井真湖（2013）「『元朝秘史』の“モンゴル英雄叙事詩"的研究-現代に残る伝説から『元朝秘史』の物語分析へ-」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』15 号，15-43 頁
藤井真湖（2015）「『元朝秘史』におけるアムバガイ事件―クトゥラ関与の仮説に基づいて―」『愛知淑徳大学論集　グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科』第 7 号，11-32 頁
藤井真湖（2016）「『元朝秘史』におけるジュルキン集団を殲滅する非明示的論理―ブリ・ボコがチンギスの味方であったという仮説に基づいて」『愛知淑徳大学論集　グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科』第 8 号，1-21 頁
藤井真湖（2019）「『元朝秘史』におけるシギ・クトゥク―ジャムカ亡き後の作者の共感対象として」ボルジギン・フスレ〔編著〕『改定版　ユーラシア草原を生きる　モンゴル英雄叙事詩』三元社，109-137 頁
藤井真湖（2023）「『元朝秘史』におけるチンギス・カンの死：イェスイとトルン・チェルビが関わっていたという仮説に基づいて」『愛知淑徳大学論集　グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科』第 15 号，1-28 頁
松田孝一（1983）「ユブクル等の元朝投降」『立命館史學』四，1983 年，28-62 頁
松田孝一（2015）「第 1 章　チンギス・カンの国づくり」『チンギス・カンとその時代』（白石編）勉誠出版，1-28 頁
村岡倫（1985）「シリギの乱－元初モンゴリアの争乱－」『東洋史苑』第 24・25 合併号，307-344 頁
村山正二（1976）『モンゴル秘史３　チンギス・カン物語』東洋文庫
【英語】
Atwood, C. P. (2007). The Date of the ‘Secret History of the Mongols’ Reconsidered. *Journal of Song-Yuan Studies*, 37, Society for Song, Yuan, and Conquest Dynasty Studies.
Atwood, C. P. (2023). *The Secret History of the Mongols: Translated by Christopher P. Atwood*. [Kindle edition]. Penguin Classics.
De Rachewiltz, I. (2004). *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century* (Vols. 1-2). Brill.
Ratchnevsky, P. (1993a). *Genghis Khan: His life and legacy* (T. N. Haining, Trans. & Ed.). Blackwell Publishing. (Original work published 1983)
Ratchnevsky, P. (1993b). Advisers and Administrators, 6. Sigi Qutuqu (ca. 1180-ca.1260), *In the Service of the Khan*. In I. de Rachewiltz, H. Chan, H. Ch’i-ch’ing, & P. W. Geier (Eds.), Wiesbaden (pp. 75-94). Otto Harrassowitz.

注

[1] 発表タイトルは The Role of Heroic Epic Studies in Analyzing Narrative Breaks within the *Secret History of the Mongols* である。

[2] これに基づくと、次の 2 つの節が除外されることになる。そのひとつは、巻 5 § 148 である。当該節の末尾ではチンギスがタイチウド集団を殲滅して彼らに従属する人々を移動させてきてクバ・カヤの地に冬営したとある。もう一つは、巻 7 § 187 で、当該節の結末にケレイトの人々を滅ぼして、その冬はアブジア・ゴゲルで冬営したという内容である。補足すると、秘史には、モンゴルの君主になった人物以外にも、故郷帰還の叙述がある。たとえば、巻 10 § 236 でスベテイがメルキト集団のクトゥ、チラウンを頭とするトクトアの子たちを追討して帰還したとある。その他にも、巻 10 § 237 にジェベがナイマン集団のクチュルグ・カンを追討して帰還したこと、続集巻一 § 253 でチンギスの同母弟であるカサルが北京城塞を下して女真のブカヌを帰属させて大本営に帰還したとある。

[3] このような立場は多くの歴史家の採ってきた立場とは異なるものである。

[4]周辺のドルベトやバヤトなどにおいてはそうした厳格な作法は知られていなかったものの、英雄叙事詩の伝承が専ら“記憶”に依拠していることは英雄叙事詩の伝承においてよく知られていることである。そして、この“記憶”というものは現象的には動態的なものであるが、理念的には静態的なものとして認識されている。それゆえ、アルタイ・ウリヤンハイ集団のこうした英雄叙事詩を変えてはいけないというような言説が、たとえ他の諸集団で明確に言語化されていないかといって、そうした改変が伝承過程で考慮されていないことは重要である。

[5] 白石典之氏によると、サアリ・ケール（本論のサアリ・ケエルに同じ）の位置はウランバートルから東南へ約 100 ㎞の広大な平原の真ん中にあり、サアリ・ケールという地名は、明の永楽帝の親征記録『北征録』にみられ、チンギスの宮殿跡だと記されているという（白石 2015：210）。白石氏は現在はブールルジュートと呼ばれている場所だと特定したという（同頁）。当地は水と草が豊かな場所で、秋というよりも温暖期全体で過ごしやすい場所であり、今も建物跡が残り、地面には当時の陶磁器片が落ちているという（同頁）。

[6] 白石典之氏は、この秘史にも言及しながらカラトン（本論のカラ・トゥンに同じ）について次のように指摘している。（カラトンは）黒い林という意味で、トーラ川流域にあったと記されている。その位置は特定されていないものの、モンゴル人考古学者のペルレーはウランバートル市西郊のブフグを候補地としている。トーラ川沿いに柳がうっそうと茂り、契丹（遼）時代に築かれた城が残る。この城はモンゴル帝国時代にも使われたことが出土陶磁器片からわかるため、ペルレー説が今日でも有力視されている（白石　2015：210）。

[7]　以前の拙稿では秘史の作者についての全体像が見えていなかったため、仮設的に括弧をつけて「作者」（「語り手」とも）と表現していたが、本論ではその必要がなくなったと思われるので、本論では括弧を取り外し 、強調の意味で“作者”と表記した。

[8] 拙論においては、巻 4 § 129～ § 132 における十三翼の戦いについて論じたときにチンギスが金朝に投降した可能性を論じた（藤井　2016）。ちなみに、Ratchnevsky 氏はチンギスの生涯の初期の動向には秘密とされる部分が多く、それは世界征服者の威信に抵触するものであったからだと推測している。それに関わる事柄として、チンギスはこのダランバルジュドの戦いに敗北した後、チンギスはモンゴルから金朝に逃亡したことを指摘している（Ratchnevsky 1993a：49-50）。氏はモンゴルに対する記事に配慮の必要のなかった、南宋の趙珙撰『蒙韃備録』では、チンギスが金朝で捕虜となっていた記事も紹介している。Ratchnevsky 氏の見解に沿う論考として、松田孝一氏は 1196 年のオルズ河の戦い（秘史では巻 4 § 132～ § 134-藤井注）で“正式な金朝従属者の地位”を手に入れ、その後、1202 年に対ジャムカ連合軍との戦いでテムジン（チンギス）とトオリル（王罕）が長城地域すなわち金朝が固めた防備圏内に避難して勢力を温存できたのは彼らが金朝協力者で金朝辺境に出入りできたからだと指摘してい

る（松田 2015:8,14-15）。

[9] 筆者はこの文献を未見のため、ラケヴィルツ氏の文献から引いておく。

[10] 前述のように、トルイはオゴデイをチンギスの後継者にするチンギス時代の家族会議でオゴデイ支持を表明しているが、実は彼の発言には不可解なところがある。彼の発言の冒頭部分を原文と共に記しておくと、11:32:03　… Tolui…（略）…（トルイが）／11:32:04 ügüle=rün ≪bi *qahan ečige-yin nereyid=ü=ksen* aqa-yu'an（言うには、「私は*君主たる父の名ざした兄*を」／11:32:05 dergede a=ǰu umarta=qsan-i doratqa=ǰu umtara=qsan-i （傍にいて、忘れたことを申し上げ、眠っていたことを）／11:32:06 seri'ül=ǰü（呼び覚まし）…後続の文は省略…とある。チンギスは直接オゴデイを後継者に指名したわけではないにもかかわらず、トルイはそう受け取っている。これは、この部分がオゴデイ時代に「書かれた」ものであることを暗示している。

[11] 本論においては帝位の空位期間については考察から除外している。

[12] グユクの即位については杉山正明氏の次の叙述が参考になる。1241年に第二代のオゴデイが他界した後、モンゴルの帝位はなんとグユクがひきついだ。キプチャク草原でバトゥと不和となり、モンゴル本土に召喚されたことが幸運となった。そもそも、オゴデイの突然の他界、そしてほとんど同時のチャガタイの死、いずれも大いなる可能性をとしてともどもに毒殺の匂いが濃密に漂う。…（中略）…ともかく、オゴデイの他界後、第六カトン（皇后）にすぎなかったドレゲネが、遊牧宮廷たる大オルドの実権を握った。大カトンのボラクチン以下、他の后妃たちの動静は記録からはうかがいしれない。このあたり、あきらかに作為がある。だが、ドレゲネ必死の多数派工作は、時間がかかった。グユクの即位には、オゴデイ第二子で、弟クチュの死後に「東宮皇太子の宝」をうけていた旧タングト（西夏）領の主人たるコデンも反対していた。だが、コデンは病身であった。かくて、オゴデイ崩御より四年八ヶ月、1246年八月にグユクが第三代の大カアンとして即位した（杉山　2008：178）。

[13]Christpher.A.Atwood氏は論文“The Date of the ‘Secret History of the Mongols‘Reconsidered”（2007年）において秘史の年代のアナクロニズムを詳細に論じているが、本論で大きな転換点とした§263（本論でのパートⅡ）を氏はアナクロニズムの検討の箇所とは別のところで1241年（オゴデイ時代）ではなく1259年（モンケ時代）よりあとの記述であるとみなすほうが妥当だとしている（16頁）。「脂肪にくるまれても犬に食べられない子どもが生まれても…」の発言がなされる§255以外にも、氏は本論のパートⅡに該当する部分をモンケ時代以降の叙述であるとみなしている箇所がある。これに基づくならば、パートⅡをグユク時代ではなく、グユク時代以降、とするのが妥当ということになる。

[14] チンギス・カンがジュルキン集団を殲滅する非明示的論理については拙論（藤井　2016）を参照。

[15] むろん、史実としては、アリク・ブカが君主を名乗ったのは1264年ではなく、1260年に兄クビライと同時期に名乗ったことでカアン位をめぐる帝位継承戦争が勃発した。

[16] カブルから三代の非明示的な政権の推移事情については（藤井　2015）を参照。

[17] アリク・ブカがその後クビライに助命されたこと、そしてアリク・ブカの長子ユブクルその他のアリク・ブカ派の動向については松田孝一氏の論考を参照（松田　1983）。

[18]アリク・ブカ自身の命運は尽きたとはいえ、クビライ時代においてもアリク・ブカ派の政治的な重要性は持ち続けていた。注17の松田論文も扱っている内容であるが、このことは至元一三年（1276年）にトゥルイ家傍系のトク・テムルが先帝モンケの子シリギを擁立して反クビライとして挙兵したシリギの乱が示している。シリギの乱の中核を担ったのは、旧アリク・ブカ派の属する諸王たちだったからである。アリク・ブカの長子ユブクルもこの乱に加担していた。このシリギの乱については村岡倫氏の論考を参照（村岡　1985）。

[19] 白石典之氏によれば、オルドという語には３つの意味があり、1つめは宮殿のことで、その建物自体をオルドと呼ぶ。二つめは宮殿の置かれた場所のことである。三つめは宮廷のことで、その組織のことをオルドという（白石　2015：211-212）。本論のオルドの用法が白石氏の

用法とどう対応しているのか、秘史におけるオルドの全用法の中で検討する必要があろう。
[20] ジャムカ即位の酉年の takiya jil の“塔”もまた非明示的に“草原”を指し、チンギスが金の配下にあったという“非草原”性と対比させている可能性がある。
[21] 当該論文の初出は Чингис Хаан Ба Монголын Эзэнт Гүрэн: Түүх, Соёл, Өв (Олон Улсын Эрдэм Шинжилгээний V Хурал 2012.07.2426.Улаанбаатархот), Редактор: Д. Шүрхүү,Б. Хүсэл, Иманиши Жүнко, Б.Сэржав である。
[22] P.Ratchnevsky 氏はシギ・クトゥクをトルイ家支持者でモンケの推戴以降には公の職に就いておらず公的生活から完全に退いたと見ている（Ratchnevsky 1993b：91）。Atwood 氏はモンケ時代に公職についていなかったというこの説には根拠はなく、Ratchnevsky 氏がこう考えたのはシギ・クトゥクの高齢に起因していると指摘している。Atwood 氏によると、モンケ時代の後半にシギ・クトゥクは復帰しており、「彼は非常に長寿でアリク・ブカの反乱の期間に亡くなった」という『集史』の引用を引くと同時に、クビライ時代でシギ・クトゥクの業績についてほとんど関心がないことはシギ・クトゥクがアリク・ブカの反乱を支持したことを示唆していると論じている（Atwood　2007：18）。
[23]シギ・クトゥクがチンギスの実母ホエルンの第 6 番目の息子となったという秘史の叙述は史実として疑問視されている（たとえば、Ratchnevsky 氏の前注の著作の p.78 等）。おそらく、多くの歴史家が指摘しているように、シギ・クトゥクはチンギスの実母ホエルンではなくチンギスの正妻ボルテの養子である。シギ・クトゥクの秘史での設定は“第一の作者”であるナヤアがホエルンに好意を寄せていて、チンギスとシギ・クトゥクの二人をホエルンと自分との間の「子ども」と見立てようとしたためであると考えられる（藤井　2019）。
[24] Christpher.A.Atwood 氏の最近の著作（2023）においては、ナヤアとシギ・クトゥクを秘史の重要なインフォーマントだった可能性に言及している。
[25] 実は、秘史では農作物を意味する塔舌里牙楊（§177）や農民を意味する塔舌里牙只泥（§257）にも“塔”が用いられている。しかしこれらは本論での反証とはならない。これについてはまた別の機会に論じてみたい。
[26] アリク・ブカの正統性については歴史家の主張は一致しているようであるが、杉山正明氏の次の叙述は特に注目しうる。「なにより紛れもないのは、フレグ・ウルスで編纂された『集史』においてさえ、アリク・ブケについては「クビライ紀」のあとに、あたかもそれに準じるかのように別項が設けられているばかりでなく、「世界王統図」とも言うべきペルシア語の系譜集『シュアブ・イ・パンジュガーナ』すなわち『五族譜』において、はっきりとアリク・ブケを歴代皇帝の一人として扱っているのである。ただし、アリク・ブケとクビライが、それぞれ何代目かは明示しない。アリク・ブケの「在位」を否定しなければならない政治上の立場にあるはずのフレグ・ウルスでさえ、「大カアン」としてのアリク・ブケを記録から抹殺し去ることはできないだけの現実があったのである」（杉山　1996：153）。
[27] Christpher.A.Atwood 氏は秘史と『聖武親征録』とを対比して、両者が全く異なるスタイルの歴史叙述である点を重視して、後者がクビライの歴史プロジェクトによる産物であるのに対して、秘史がクビライのそうした歴史的なプロジェクトが始まる前に編纂された可能性を指摘している（Atwood　2007：15）。氏の論文において考察されている秘史で観察されるアナクロニズムについての箇所（7-14 頁）についていえば、本論の仮説、とくに、“英雄叙事詩的設定”ではなく実際に書かれた時期についての仮説とも抵触するものではない。いずれにせよ、Atwood 氏は§282 の鼠の年を 1252 年としているため、続集巻二の§274 において、モンケ時代のイェスデル・コルチの高麗派遣（1258 年）がオゴデイ時代の出来事の中に挿入されたことの意味を問わなければならなくなっている。本論では、この§274 はパートⅣの最初の節であり、これは“英雄叙事詩的時代設定”ではモンケ時代のことであるものの、実際に書かれたのはアリク・ブカの時代以降だとしたので、この問題を問う必要がなくなっている。

正誤表

頁	p.2
正誤箇所	上 2-3
誤	秘史の内容はンゴル英雄叙事詩
正	秘史の内容はモンゴル英雄叙事詩

頁	p.19
正誤箇所	上 1-2
誤	チンギス（勝者）vs ジャムカ（勝者）
正	チンギス（勝者）vs ジャムカ（敗者）

※正誤表は 2024 年 3 月 15 日追加されました。

愛知淑徳大学論集. グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇　第 16 号（2024 年 3 月 17 日発行）p.1~p.30
論文タイトル『元朝秘史』における叙述のダイナミクスと作者の交代~故郷への帰還の役割とコロフォン§282 における特異な終結の分析